

特別企画

ベートーヴェン 生誕250周年に 寄せて

文：西原 稔
Text：Minoru Nishihara



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
(1770年12月16日頃生～1827年3月26日没)

ドイツ・ボン出身の作曲家、ピアニスト。幼い頃より宮廷に仕える音楽家の父から音楽を学び、21歳のときに、当時の音楽の中心地であったウィーンに出る。20代後半から耳に異常を感じ始め、30歳の頃に聴力のほとんどを失ってしまったが、それを乗り越えて56歳で亡くなるまで作品を書き続けた。

2020年は、ベートーヴェンのアニバーサリー・イヤーです。12月に生誕250周年を迎えるベートーヴェンは、誰もが知る作曲家であり、あまりにも有名な存在です。しかし、私たちはどれくらい彼のことを知っているのでしょうか？ 生誕250周年にあたり、現代の視点からベートーヴェンについて考えるべく、音楽学者の西原稔先生にご寄稿いただきました。

現代に伝わるベートーヴェン像から

音楽の教科書に必ず出てくるベートーヴェン。偉大だと言われるけれど、その理由は？

ベートーヴェンが偉大であったのにはさまざまな理由があります。一つは歴史に残る名作を数多く作曲した点です。そしてあとから詳しく述べるように、その作品が後世の作曲家に強い影響を及ぼしたことも大きな理由です。

音楽の歴史の中には偉大な作曲家は数多くおります。ベートーヴェンの先輩ではバッハやハイドンやモーツァルトも偉大な作曲家でとても有名です。これらの作曲家も不滅の名曲を数多く残しており、そのなかには私たちの馴染みの作品も少なくありません。バッハの「マタイ受難曲」やモーツァルトの交響曲《ジュピター》、ハイドンの交響曲《驚愕》などの名作があるなかで、ベートーヴェンの作品の偉大さは、これらの先輩とは少し意味が違うようです。

ベートーヴェンの作品は生きた社会と密接に結びついているところがあります。ベートーヴェンは自由な市民としてウィーンで活動し、ウィーンの町ではベートーヴェンはとても有名でした。一人の芸術家として、宮廷や教会のしきたりにとられることなく自由に創作し、自由に発言し、そしてその創作は貴族だけではなく、市民の人々の関心の的でした。ベートーヴェンは独特の風貌や性格でとても目立っていましたが、そのこととは別にウィーンの人々は皆、ベートーヴェンをとても誇りに思っていました。

ベートーヴェンはウィーンの社会の中で、自分が音楽家としてどのように振る舞わなければならないのかということを見つめていたように思います。たとえばバッハの末娘のレギーナ・

ズザンナ(1742-1809)が老境に入り困窮に瀕していることを知り、彼は「弦楽五重奏曲」(作品29)の出版の収益を寄付し、ナポレオン戦争の時期には、ハーナウ戦役傷病兵のための救済資金調達慈善演奏会で「交響曲第7番」(作品92)と「ウェリントンの勝利」(作品91)を初演しており、これらの作品は聴衆の大喝采を受けています。このような音楽家はこれまでにないタイプでした。

人々に直接に訴えかける力という点で、ベートーヴェンの作品は強い影響力をもっていました。その意味ではベートーヴェンは、他の作曲家よりもどこか市民に近い位置にあったように思います。人々がベートーヴェンに偉大さを実感するのは、彼の作品が私たちの感覚に直接に訴えかけてくる場所にあったのかもしれない。それを象徴するのが「交響曲第9番《合唱付き》」(作品125)でしょう。年末になると全国で、プロ、アマチュアを問わず数多くの合唱団がこの作品を演奏します。そして合唱を通して「偉大さ」を実感しているのではないのでしょうか。

「楽聖」と呼ばれているのはなぜ？

「楽聖」というのは音楽の聖人という意味です。聖人はキリスト教の位の高い聖職者(お坊さん)のことを指します。しかし、ベートーヴェンはお坊さんではありません。作曲家の中には教会で活躍した人も音楽の歴史には数多くおりますが、「楽聖」という場合はそういう音楽家のことを意味しているのではなさそうです。

偉大な音楽家が「楽聖」として尊敬されるようになったのは19世紀に入ってからで、ロマン主義がとても大きな役割を果たしました。空想や幻想やメルヘンを題材とした文学や絵画がこのころから盛んになり、そのなかで芸術作品がとても神々しいものとして高い評価を受けました。そして芸術家は、天から遣わされた偉大な才能であるとして特別に高い尊敬を受けるようになります。そのもっとも重要なロマン主義者が、判事であり作家で、音楽評論家で、作曲家でもあった、エルンスト・テオドール・ホフマンです。ホフマンはベートーヴェンのことを最初のロマン派の音楽家と呼んでいます。

このような思潮が背景になり、ベートーヴェンに対して「音楽の聖人」という特別の見方がされるようになりました。18世紀では音楽家は教会や宮廷の使用人であったのに対して、19世紀になるとベートーヴェンはこのような特別の評価を与えられました。面白いことにすべての作曲家が楽聖になったわけではなく、シューベルトにはそのような評価は与えられており

ません。19世紀に描かれたゲゼルシャープ画の「ベートーヴェンの誕生」は、ベートーヴェンの誕生をキリストの誕生になぞらえたデザインになっています。ベートーヴェンを聖人として敬う傾向は、苦難に打ち勝ち、崇高な芸術を私たちに残した偉人として、その後の19世紀の伝記文学のなかでさまざまな形で描かれました。

音楽史上でベートーヴェンが果たした役割は？

近代の音楽の歴史において、ベートーヴェン以前とベートーヴェン以後は、作曲家の創作の姿勢や創作の大きな節目になっています。ベートーヴェンはバッハも深く研究し、古典派の音楽をまとめ上げ、その後のロマン派の音楽の土台を築いたと言っても過言ではありません。ベートーヴェンの32曲のピアノ・ソナタや9曲の交響曲には、それまでハイドンやモーツァルトが培ってきた伝統を吸収し、彼自身の表現でまとめ上げました。さまざまな表現法や作曲技巧、それに多様で多彩な感性がこれらの作品に集約されています。そして、たんに吸収するだけでなく、ベートーヴェンは一作ごとに新しい世界を切り開いていきました。

人間・ベートーヴェン

引越好き、変わり者……
たくさんのエピソードがあるけれど、実際はどんな人？

ベートーヴェンは少年時代からとても誇りが高く個性の強い人物だったようです。ベートーヴェンの祖父はベートーヴェンと同姓同名で、ボンの宮廷楽長でした。ベートーヴェンはこの祖父のことをとても尊敬していました。その一方で、酒乱で家庭を顧みない父ヨハンにはとても強い反感をもち、彼は家庭を守るために父親を退職させて、ベートーヴェンが年金の受取人となることまでも行っています。

とても自身の主張を曲げない性格で、理不尽だと思ったときは相手が貴族であろうとも遠慮することなく決然とした態度をとりました。その一例が、ベートーヴェンがウィーンに移り住んだときに最初に手を差し伸べたりヒノフスキー侯爵とのことです。侯爵はベートーヴェンに住まいを提供したり、ベートーヴェンの音楽活動を支援し、年金まで提供しました。しかし、ナポレオン戦争のときにウィーンに進軍したフランス兵の



1787年にモーツァルトを訪ねたベートーヴェンがピアノを弾く様子

前で演奏するように侯爵は求めましたが、ベートーヴェンは理不尽と思い、雨の中、侯爵のもとを飛び出しました。また、同じくベートーヴェンの支援者であったフリース伯爵に「弦楽五重奏曲」(作品29)を献呈しましたが、フリース伯爵はこの作品を出版したいという出版社からの申し出を受けて、出版社にベートーヴェンに断って出版してほしいと言いました。ベートーヴェンは別の出版社からの出版を考えており、理不尽だと思って裁判に訴えました。当時は作品の献呈を受けた場合、被献呈者は作品を独占的に使用する権利を持っており、またフリース伯爵は出版社にベートーヴェンにその旨を断ってから出版してほしいと言っていたために、裁判でベートーヴェンは敗訴しています。

裁判との関連では、ベートーヴェンは亡くなった弟カールの息子の親権をめぐる、弟の妻と裁判で争います。ベートーヴェンは甥をとてかわいがり、どうしても自分の子としたかったようです。彼は何度も裁判に臨み、ついに親権を勝ち取ります。しかし、甥は弟カールの形見の時計を質に入れてピストルを購入し、それで自殺を図ります。運よく命はとりとめますが、ベートーヴェンはとても苦悩したようです。ベートーヴェンは亡くなる時に全財産をこの甥に相続させています。

ベートーヴェンの人物像を物語るエピソードとして、恋愛があります。ベートーヴェンは作曲についても恋愛についても全力投球でした。ベートーヴェンはいつも恋をしていたと言われるほどに、とくに貴族の女性に愛を捧げました。「不滅の恋人」宛の熱烈なラブレターはとて有名です。その文面は本当に心の底から純粋に愛を捧げている内容で、心打たれます。この「不滅の恋人」は今日の研究ではアントニーエ・ブレンターノとされています。そのほか、ヨゼフィーネ・ブルンスヴィックへのラブレターも熱烈です。これほど強い愛の言葉を表明した作曲家はほかにはいなかったのではないのでしょうか。

この一途さは作曲にも通じています。一つの作品を仕上げる

まで、ベートーヴェンは数多くのスケッチを書き、推敲に推敲を重ねてまさに一途に創作に没頭しました。この集中力と純粋さは他の追従を許さないところがあります。一切、妥協はすることなく、自分の理想とするものが実現するまで深く追求する姿勢こそがベートーヴェンの真骨頂でしょう。

ベートーヴェンは本当にさまざまな側面をもった音楽家でした。強気で自己主張を通す一面、愛する女性への献身的な姿勢、理想を目指す創作態度、とりわけルドルフ大公に代表される恩人への限りない尊敬の念などの側面の他に、神への祈りも彼の人物の一面を表しています。ベートーヴェンと神様は似つかわしくないように見えますが、とくに晩年になって体調が思わしくなくなると、創作を続けることへの神への感謝が語られるようになります。「弦楽四重奏曲第15番」(作品132)の第3楽章は、「リディア旋法による、病より癒えたる者の神への聖なる感謝の歌」と記され、「ミサ・ソレムニス」(作品123)の「アニヌス・デイ」の「我らに平安を与えたまえ」はまさにベートーヴェンの祈りの音楽です。

ベートーヴェンが遺したもの

影響を受けた後世の音楽家は？

ベートーヴェンはバッハと並んで、後世の音楽家にとても強い影響を及ぼしました。その後の作曲家にとってベートーヴェンは理想であり、決して模倣することの出来ない独自で崇高な世界です。ベートーヴェンと同じ時期にウィーンで活躍したシューベルトは早い時期からベートーヴェンの影響を受けていました。その後、ベートーヴェンから一時離れますが、晩年ふたたびベートーヴェンを深く研究して、傑作を残しました。彼は臨終の床に就いていたベートーヴェンを見舞い、とても強い感動をおぼえ、シューベルトは亡くなる時にベートーヴェンの隣に埋葬してほしいと語っていました。その後、メンデルスゾーンやシューマン、リスト、ヴァーグナー、ブラームスなど、ドイツ語圏の作曲家はみなベートーヴェンを理想としていました。メンデルスゾーンの初期の3作の「ピアノ四重奏曲」(作品1, 2, 3)はベートーヴェンを模範としており、「弦楽四重奏曲第2番」(作品13)ではベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第17番《テンペスト》」(作品31-2)の第1楽章のレチタティーヴォの動機が借用されています。

シューマンもベートーヴェンから強い影響を受けました。ピアノ独奏のための「幻想曲」(作品17)の第1楽章の主要主題

は、ベートーヴェンの連作歌曲集「遥かなる恋人によせる」(作品98)の第6曲の旋律に基づいています。またこの作品の第2楽章はベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第28番」(作品101)の第2楽章に影響を受けています。「弦楽四重奏曲第3番」(作品41-3)の第1楽章は、ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第18番」(作品31-3)の第1楽章の主題の動機を借用しています。

リストは、ベートーヴェンの全交響曲をピアノ独奏用に編曲し、ベートーヴェンの創作法に深く通じており、それを土台に新たな創作に取り組みました。ブラームスはもっとも直接的にベートーヴェンの影響を受けた作曲家で、1853年にシューマンを訪問した際に、シューマンの前で演奏した「ピアノ・ソナタ第1番」(作品1)の主題は、ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィア》」(作品106)第1楽章の主題を借用し、「ピアノ・ソナタ第3番」(作品5)ではベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第23番《熱情》」(作品57)の第1楽章の動機をもちいています。ブラームスはハンブルクに住んでいた若いころからピアニストとして盛んに演奏活動を行っており、ベートーヴェンのピアノ・ソナタを得意としていました。その後、ブラームスはベートーヴェンの弦楽四重奏曲や交響曲を深く研究して、自身の創作に反映させていきました。



ドイツ・ボンのベートーヴェンの生家

最新の研究で、解き明かされた作品は？

ベートーヴェンに関する情報で大きなトピックとなったのは、「交響曲第6番《田園》」です。1808年12月22日に「交響曲第5番《運命》」とともに初演された5楽章のこの作品は、各楽章に簡単な文章が添えられています。この作品は、1785年に作曲されたユスティン・ハインリヒ・クネヒトの「自然の音楽的描写」と題する交響曲と密接に結びついていることが明らかになりました。クネヒトのこの交響曲も5楽章で、各楽章にベートーヴェンと同様の、もっと長い説明文が付されています。たとえば第1楽章は、「美しき田舎と太陽は輝き、甘い西風そよぎ、小川は小さな谷間を横切って流れる。鳥たちは囁き、溪流は高いところから轟音を立てて流れ落ちる。羊飼いが口笛を吹くと、羊たちは飛び跳ねる。羊飼いの恋人は優しい声を発する。」、嵐の到来する第3楽章では、「風を伴う雷雨は大きな音を立て、雨は大きな音を立てて打ち付け、木々の先端は音を立て、濁流が恐ろしい音を立てて水しぶきをたてる。」と記されています。さらに、動機についても関連性が見られ、ベートーヴェンはクネヒトのこの作品を参考にして、さらに充実したオーケストレーションと楽曲構成を施して《田園》を完成させたと考えられています。

西原 稔(にしはら・みのる)

山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。現在、桐朋学園大学音楽学部教授。18、19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。「音楽家の社会史」、「聖なるイメージの音楽」、「音楽史ほんとうの話」、「ブラームス」(以上、音楽之友社)、「ピアノの誕生」、「クラシック 名曲を生んだ恋物語」(以上、講談社)、「楽聖ベートーヴェンの誕生」(平凡社)、「クラシックでわかる世界史」、「ピアノ大陸ヨーロッパ」(以上、アルテスパブリッシング)などの著書のほかに、共著・共編で「ベートーヴェン事典」(東京書籍)、翻訳で「魔笛とウィーン」(平凡社)、監訳・共訳で「ルル」、「金色のソナタ」(以上、音楽之友社)、「オペラ事典」、「ベートーヴェン事典」(以上、平凡社)などがある。